

CAWA 翻訳シリーズ紹介

『フェミニズム、民主主義および人権の理念の統合
—スニー・チャイヤロットの経験的研究—』ますだ しん
増田 真

本書はスニー・チャイヤロットさんが2004年5月にタマサート大学大学院女性学課程に提出した修士論文『Kanlomruam udommakan feminit prachathipatai lae sitthi manutsayachon : sukso phan prasopkan Suni Chaiyarot.』の日本語訳である。本論文はタマサート大学の2003年度優秀論文に選ばれたが、選考委員の中に「個人史をもとに論文を書くことが妥当かどうか」という疑問の声があったようだ。しかしながら、本書の目的は単なる個人史を書くことでなく、自らの経験に照らし合わせながら、フェミニズム、民主主義、そして人権の理念の統合過程を明らかにし、それらの理念の実践、並びに経験の理論化にまで結びつけることである。スニーさんも述べているように、さまざまな女性の経験は単に個人的な問題でなく社会全体の問題につながっているし、それらの経験を持ち寄って分析することの意義も説明されている。従って、個人史をもとに研究を行うという方法自体を批判することは本論文に関しては正当ではないだろう。

著者であるスニーさんの人生や活動については本文中に詳しく描かれているので、簡単に略歴だけ紹介しておく。スニーさんは1954年6月24日生まれ、旧名はニパーパン・パッタナパイブーンで、結婚した際に現在の名前に改名した（本書でも他の文献でも旧名で言及されている場合があるので注意が必要である）。1970年にタマサート大学経済学部に入學、1年生のときから学生運動に参加し、4年生のときに「73・10・14事件」を経験した。卒業後は労働組合を手助けする仕事をし、76年3月に共産主義者容疑で逮捕され、4ヶ月間収監された。「76・10・6事件」が起きると、姉や友人とともに東北タイの森に入り、タイ共産党の武力闘争に加わった。82年に森から出てきて、87年に夫とともに再び共産主義者容疑で逮捕され、生後2ヶ月半の息子を抱えて刑務所に8ヶ月間収監された。出所後は編集者として働いた後、ノンブアラムプー県議会議員、憲法起草議会委員などを務め、現在は国家人権委員会委員として多忙な日々を送っている。本論文は国家人権委員会委員の職務をこなしながら書き上げたものである。

スニーさんの半生をタイ史の流れに位置づけると、1950年代末からのサリットの開発独裁体制によって社会が大きく変化し始めた時期とほぼ重なる。サリット時代、それを継いだタノーム＝プラパー体制下では民主主義の理念は後退した。1960年代半ばからはベトナム戦争への対米協力が本格化し、国内でも武装闘争を開始したタイ共産党に対する掃討作戦が実施された。一方、積極的に工業化が進められ、農村から多くの女性が安価な工場労働者として雇われるようになった。また、タイで休暇を取る米兵向けの性産業が成長した。1970年代に入ると、日本商品不買運動を一つの契機として学生運動が活発になり、一般市民からも注目を集めるようになった。勢いをつけた学生運動は反日運動のみならず、反米、反独裁の運動へと拡大していき、「73・10・14事件」に至ったのである。事件後、民

主的な政治の雰囲気の中で学生、労働者、農民などの運動が盛んに行われたが、軍部を中心とした旧勢力の巻き返しがあり、「76・10・6事件」が起きた。そこで多くの人たちが森に入り、タイ共産党の武装闘争に参加したが、やがてタイ共産党の姿勢に幻滅し、80年代初頭のプレーム政権による穏健路線もあって、多くの人々が森から出てくるようになった。80年代は曲がりなりにも議会制民主主義が実現していたが、91年に軍部がチャートチャイ政権の腐敗を理由にクーデターを敢行した。翌年にクーデター首謀者のスチンダーが首相の座に就くと、反スチンダーの運動が始まり、軍と民衆が衝突して多くの犠牲者を出した（「92年5月事件」）。それ以後、軍部の政治的影響力は著しく後退し、97年にはタイ史上もっとも民主的と言われる人民版憲法が誕生した。

本論文の最大の特徴と魅力は、以上のような激動の歴史の中で著者自身の波乱に満ちた半生を中心に母親や友人たちの話を交えながらタイ現代史における女性の社会的状況が具体的に描かれていることである。特に、子ども時代の生活、二度にわたる刑務所での生活、そして森で武装闘争を行っていた頃の生活は当事者にしか知り得ない状況が詳細に示されており、非常に興味深い話がたくさんある。また、母親のキムスワンさんの手記や友人である「10・14のフェミニスト」たちの証言についても、一人の女性の物語として、また、スニーさんの主張を理解する上でも貴重な資料となっている。こうした具体的な記述の部分は女性学やフェミニズムに関する知識や関心がない人にとっても興味を持てる内容であろう。

写真：タイ語版表紙

